

富士見 ユキオさん

岸原 千雅子さん

プロセスワークの「紛争の心理学」と  
ハーバード流交渉術の「自分にイエスという」  
～臨床現場からの交渉術～

2015 年 11 月 13 日に開催された第 25 回 變会では、2015 年 1 月に交渉アナリスト 1 級会員の仲間入りをされた富士見ユキオさん、岸原千雅子さんご夫妻に講義を行っていただきました。お二人はともに臨床心理士であり、プロセスワークの指導者そして、ファミリービジネス・アドバイザーなど取得されたたくさんの資格を活かして、人々が心の葛藤や家庭内の紛争などを乗り越えられるよう、導くお仕事に長年従事されています。

講義では、日々お二人が、個人や家族、組織のカウンセリングやファシリテーションを行う中で役立てていらっしゃる、プロセスワーク（プロセス指向心理学）のグループワーク「ワールドワーク」の実践的な知恵と、『ハーバード流交渉術』のウィリアム・ユリー氏が推奨する「Getting to Yes（自分にイエス、人生にイエス、相手にイエス）」による『最後までブレない交渉術』における実践法との間にみられる共通点について、プロセスワークの創始者、アーノルド・ミンデルが実際に取り組んだ紛争解決の例を挙げて、解説してくださいました。

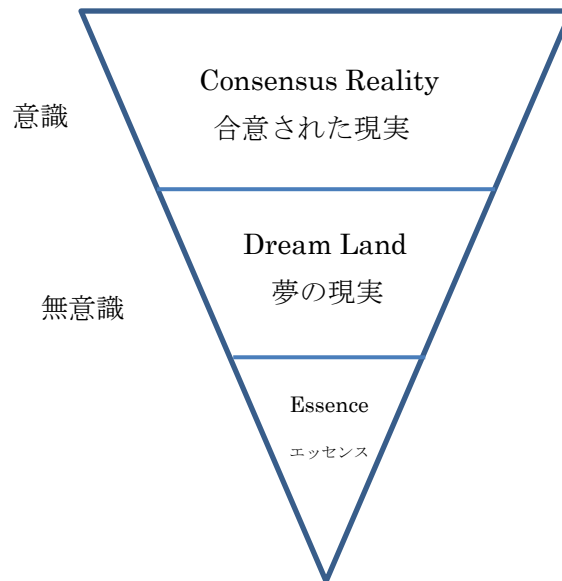
### プロセスワーク（プロセス指向心理学）とは？

プロセスワーク（プロセス指向心理学）とはユング派分析家のアーノルド・ミンデルが創始した心理学の実践法です。現在は個人の心にとどまらず、身体症状や病、家族や会社組織、国際間紛争の解決に活用されています。

ミンデルは、人間の無意識の中にある主体が夢や病・身体症状を引き起こしていると考え、そこにあるロジックを分析することが治療に役立つということを発見しました。個人の夢や身体症状に取り組む「ドリームボディワーク」とは別に、プロセスワークの手法を組織など複数人間間の紛争に応用するのが「ワールドワーク」です。

プロセスワークでは意識（世界）を階層化して捉えています（次頁図参照）。Consensus Reality（合意された現実）、Dream Land（夢の現実）、Essence（エッセンス）の 3 階層のなかで、Consensus Reality は意識されている日常の次元、Dream Land は個人的無意識である夢や空想の次元、Essence は言葉で表現できない量子レベルの次元です。別次元に存在する事象が Consensus Reality の次元に出現する瞬間を捉えて、紛争解決に役立てることができるという例をエイミー&アーノルド・ミンデルが実施したアイルランド・ダブリンでのワールドワークのケースからご紹介いただきました。

## 意識の階層



### ミンデルらによるワールドワークとユーリーの交渉の実例から学ぶ

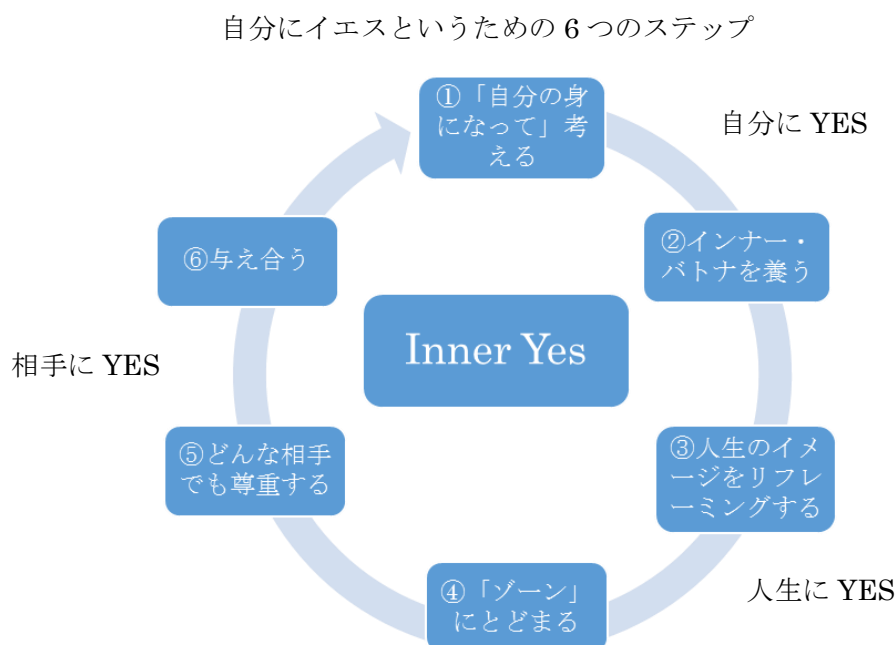
ミンデルらは、対立している「北アイルランド」の人々と「アイルランド共和国」の人々が興奮し罵り合う場で、ひとりの男性の首筋が真っ赤になっていることに気づき、指摘します。「首の赤」から連想される「死」という共通のイメージを、敵対する両者が共有することにより、両者は「ともに生きていくための方法」を穏やかな話し合いで探っていくことができ、「平和協定」調印を可決につなげることができたのです。

上記のケースのように、プロセスワーク（ワールドワーク）では、激しい諍いのなかで気づき（awareness）を保ち続ける＝**sitting in the fire** という姿勢をとります。混乱のなかで「私」＝自分の願望（問題の解決のために全力を尽くすこと）を大切にすることで、その場のすべての人が自分たちの問題として考えられる共通のベースを瞬間的に捉え、提供することができ、場を深められたのです。そして、人々は紛争の解決策をそこから見出すことができました。

ミンデルらが紛争に際しとる姿勢は、ウィリアム・ユーリーが著書『ハーバード流交渉術』で解説していた「自分にイエスというための6つのステップ」とまさに同一のものと考えられます。ミンデルらの実践も「自分にイエス」→「人生にイエス」→「手にイエス」という段階を経て、win-win-winの結果に到達することができたのです。



ここで富士見さんは素晴らしいワールドワーカーとして、故ライシャワー博士を挙げられました。



次に、ユーリーの交渉がいかに関世界ワークの手法と酷似しているかについて、「ベネズエラのチャベス大統領との会談」と「観光プロジェクト（アブラハム・パス）でのパレスチナ人指導者との交渉」を例に挙げて分析していきました。ユーリーはいずれのケースでも相手の身になって理解することに全力を尽くし、俯瞰的に相手の思考の脈絡を追いながら、解決の糸口を探します。糸口となる瞬間をつかみ、それにイエスで答えることが **win-win-win** の結果につながるのです。

こうしたユーリーの熱心に糸口を探す姿勢は、ワールドワークにおいてメタスキル（個々の具体的な技法を超えた、背後にある姿勢のようなもの）として大切にされるものと同様であると考えられます。ワールドワークの考え方に、ユーリーが述べているところの、自分の本当の願望に気づき、自分にイエスという状況をいったん手放し、相手のことも同様に尊重し、相手にイエスということで、自分・相手・場などすべてを充足できる **win-win-win** の解決に至ることが



できるという考えに通じるものを私たちも確かに感じました。

#### プロセスワークと交渉術の **win-win-win** へ

近年ワールドワークの Deep Democracy（深層民主主義）を大切にする姿勢が合意形成プロセスに活用されています。いわゆる民主主義では犠牲になってしまう人々を救う道がそこにはあるのです。富士見さんは立ち位置によってすべては変わるものであり、世の中に絶対はない、と強く説かれていました。私たちも交渉にあたる時またそれ以外の時も、視点を変えることの大切さ、難しさを常に心にとめて、実行していきたいと思います。プロセスワークについて学びワールドワークの手法を取り入れることにより、紛争のなかからお互いの本来の願望を叶えられる合意に達することができる機会を増やせるようになる可能性を強く感じた時間でした。